

記者資料提供

(県庁教育記者クラブ)

資料提供日

: 平成 24 年 (2012 年) 7 月 17 日 (火)

機 関

: 公益財団法人滋賀県文化財保護協会

件名: 大津市膳所城遺跡の発掘調査の成果

膳所城「北の丸」の石垣を確認

【内 容】

公益財団法人滋賀県文化財保護協会では、滋賀県教育委員会ならびに滋賀県道路公社からの依頼により、近江大橋有料道路建設工事（西詰交差点改良）に伴い平成 24 年 5 月に膳所城遺跡の発掘調査を実施しました。調査対象地は、膳所城（ぜぜじょう）の「北の丸」に推定される一角にあたり、調査面積は 271 m²です。

調査の結果、膳所城「北の丸」の南北端を検出し、「北の丸」内において石垣・石組溝・土坑・井戸等を検出しました。これらの遺構からは屋瓦類・陶磁器類・土器類・金属器類・石造物類・自然遺物等が出土しました。

道路工事計画の状況と安全確保の観点から、現地説明会を実施することができませんでしたが、調査成果を広くお知らせすることを目的として、今回の調査結果の概要を資料提供いたします。

* * *

1. はじめに

今回の発掘調査は、近江大橋有料道路建設工事（西詰交差点）に伴い、道路幅を広げる部分が膳所城遺跡の範囲内に含まれるため、平成 24 年 4 月～5 月に実施しました。調査の結果、これまで具体像がよくわからなかった膳所城の北の丸の様相を知るうえで重要な手がかりが得られました。

2. 膳所城の沿革と現況(図 1)

沿 革 関ヶ原合戦の後、慶長 6 年 (1601)、徳川家康は西国大名への抑えのため、関ヶ原合戦で落城した大津城から、新たに膳所崎（現大津市本丸町・丸の内町）に城郭を築城しました。これが膳所城です。膳所城には、三河以来の家康の家臣である戸田一西（とだ かずあき）が入封し、膳所藩主（三万石）になりました。その後、本多氏→菅沼氏→石川氏（七万石）と城主は移り変わりましたが、慶安 4 年 (1651) に再び本多氏が入封し（六万石）、明治 3 年 (1870) の廃城まで膳所藩政の中核施設として機能していました。

現 況 廃城後、天守等の主要施設は解体・移築されました。城域を画した石垣も琵琶湖疏水工事、東海道線建設工事や南郷洗堰工事等に石材が転用されました。戦後には、湖岸道路等の建設によって湖岸部が埋め立てられるとともに、周辺一帯も市街化が進んだため、公園となった本丸跡等を除くと、膳所城の遺構は現在地表にはほとんど残っていません。発掘調査についても、本丸跡での数次にわたる調査等以外にほとんど実施されておらず、その実態はよくわかっていませんでした。

3. 調査の概要

概要 今回の発掘調査では、膳所城北の丸が推定される範囲内（写真1の黒太破線）に3か所の調査区（写真1の黒塗り部分：調査区1～3）を設定しました。それぞれの調査区では、膳所城北の丸に関係する遺構が検出されたほか、膳所城に伴うさまざまな遺物が出土しました。以下、それらの内容について簡単に紹介します。

北の丸北端部を検出 調査区1では、北の丸北端部を検出しました（写真2）。写真2では、南側（写真奥側）の北の丸内部の地面が、調査区の北側で高さ約1.3～1.5mの段差をなしてほぼ垂直に落ち込む状況を示しました。さらに、この段差の北側（北の丸の外側）は近代期の遺物を含む砂層が厚く堆積していました。この砂層は、湖岸道路等を埋め立てる際の盛土と考えられます。

もともと、北の丸は石垣によって囲まれていました。しかし、今回の調査では、明確な石垣を確認することができませんでした。ただし、段差付近には石垣の裏込めに用いられたと見られる小石材が認められたので、石垣を検出できなかったのは、さきに述べたように、廃城後に石垣石材を転用するために除去されたからだと考えています。

北の丸内部の様子 江戸時代の絵図等により、北の丸には膳所藩の米蔵があったとされています。しかし、いままで発掘調査が行われていなかったため、内部の具体的な様子はわかりませんでした。今回、調査区2・3で石組溝2条を検出しました（写真3）。東側石組溝は幅約1～1.5mで、溝内の埋め土内からは、多くの陶磁器類・土器類・瓦類とともに海産貝類の貝殻等が出土しました。陶磁器類の時期は17世紀前葉頃が中心です。西側石組溝は幅0.3m程度と小規模でした。東側石組溝は北の丸内を区画する用水路、西側石組溝は建物の雨落ち溝の可能性があります。

新たに見つかった石垣 調査区3で新たに石垣を検出しました（写真4）。この石垣は上下2段あり、上段の石垣はおおむね東西方向にのびます。一方、下段の石垣は、西半では上段の石垣と同様に東西方向なのですが、途中でほぼ直角に折れ曲がり、南側へのびています。上段の石垣は、西端部で3段が遺存していましたが、東半部は石材の抜け落ちた箇所が多く、遺存する石材も本来の位置から移動しています。下段の石垣は、基底石のみが遺存するもので、上段石垣よりもさらに遺存状態がよくありませんでした。これらの石垣は、少なくとも近世段階に埋められたようです。

北の丸の南端部については、本丸跡（膳所公園）側にある現状の石垣が相当すると考えていました。しかし、今回の調査によって、新たにその北側でこれらの石垣が見つかったことから、北の丸内の区割りがある段階に変更されていたことがわかりました。

出土遺物 調査区1～3において、多数の遺物が出土しました。これらは、現在未整理であるため、概要を示すことにします。

【瓦類】 出土遺物の大半を占めるのが瓦類です。丸瓦・平瓦・棧瓦（さんがわら）・軒瓦（のきがわら：軒先に葺く装飾付瓦）があります。軒丸瓦の多くは巴紋軒丸瓦（ともえものきまるがわら）ですが、そのなかに本多家の家紋である立葵（たちあおい）（図2）を施した例（写真6）がありました。

【土器・陶磁器類】 東側石組溝内からまとめて陶磁器・土器類等が出土しました（写真5）。これらは、17世紀前葉を中心とする時期のものです。

【貝殻】 同じく東側石組溝内からは、海産貝類（ハマグリ・サザエ等）の貝殻がまとめて出土しています。

4. まとめ—調査からわかったこと

今回の調査は、膳所城北の丸における初めての発掘調査となりました。その結果の概要については、先に述べたとおりですが、それらは以下のようにまとめることができます。

①北の丸の北端部を確認し、北の丸の規模(南北)を推測する手がかりが得られました。

②北の丸内において、区画溝(東側の石組溝)や、建物に伴うと見られる雨落ち溝(西側の石組溝)を検出し、北の丸内の建物配置や区割り等の具体的様相を知るうえでの手がかりが得られました。

③当初想定していた北の丸南端よりも内側で新たに石垣を検出したことから、北の丸内の区割り、あるいは北の丸本体の規模がある段階に変化した可能性が見いだされました。

④石組溝内からまとまった遺物が出土したことで、北の丸内の建物等の構造や時期、さらには北の丸内での活動を推測する手がかりが得られました。

今後、整理調査を進めるなかで、①～④を手がかりとして、さらに分析を進め、膳所城の具体像を明らかにしたいと考えています

※なお、今回の資料提供の内容は、本格的な整理調査を実施していないため、以下の見解は今後変更する可能性があります。



図1 膳所城遺跡と今回の調査地

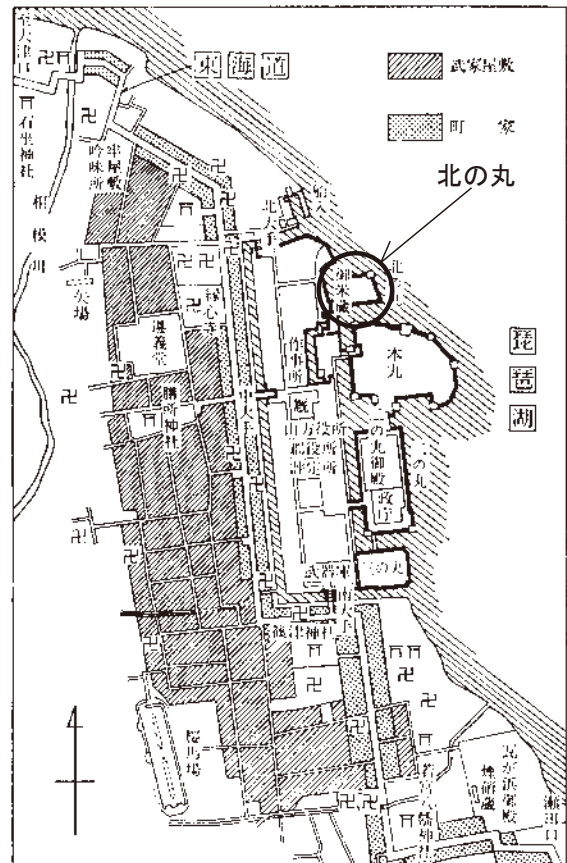


図2 膳所城と城下町
(拠『新修大津市史第4巻』)

各種の絵図をもとに想定復原されたもの。今回の調査地が含まれる北の丸を図示している。



写真1 調査地の場所 (北から)
手前側が浜大津方面、奥が石山方面。



写真2 北の丸北端部（北から）



東側石組溝

西側石組溝

写真3 北の丸内部で見つかった石組溝
（調査区3：北から）



上段の石垣

下段の石垣

写真4 新たに見つかった石垣（調査区3：南東から）



写真5 東側の石組溝から出土した陶磁器類
ほとんどが17世紀前葉頃のものと思われます。



図2 本多家の家紋—立葵



写真6 出土した立葵紋軒丸瓦